

大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金 報告書

Outcome report

計画名 Plan	産業の観点からみた中世初期イタリア修道院領の地域的特徴の解明
氏名 Name	吉田彬人
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	人間・環境学研究科・共生文明学専攻・修士課程2年
渡航国 Country	イタリア
渡航日程 Travel schedule	2023年9月10日～2023年9月28日

- ・ページ数に制限はありません。No limits on the number of pages
- ・写真や図なども組み込んでいただいて結構です。You can include pictures or illustrations.
- ・各項目について具体的に記述してください。Please fill in each item specifically.
- ・日本語または英語で記載ください。Please use Japanese or English.

渡航計画の概要 Outline of the travel plan

筆者は産業革命前の前近代において人々はどのように自然とかかわり暮らしてきたのか、そしてその結果としてどのような特徴を持った地域が形成され、その地域はどのように有機的に機能していたのかという点に関心を持っており、歴史地理学の立場からこの課題に挑んでいる。特に工場による大量生産が未だ行われていなかった産業革命前の前近代においては職人が工業生産の多くを担っていたことに着目し、職人の居住地の分布を地図に表すことで産業の観点から領国における産業の空間構造の解明を行ってきた。具体的には、16世紀末に作成された土地台帳である『長宗我部地検帳』に記載された職人の居住地のデータ化・地図化を通して、職種（鍛冶、船大工、鋳物師など）ごとの職人分布の特徴や産業の観点からみた日本の大名領国の地域的特徴を明らかにしてきた（吉田, 2023）。

そこで、前述のような筆者の関心から、対象とする時代や地域は大きく異なるものの、中世初期のイタリアにおける一修道院領の明細帳である『サンタ・ジュリア・ディ・プレシア修道院所領明細帳』（以下、『明細帳』とする。Castagnetti et al., (1979: 41-94) に所収。）を用い、同地域における産業の観点からみた地域的特徴の解明を行う本渡航を計画した。そして日伊両地域の事例を比較することで、両地域の特徴や、時代や地域を超えた普遍性の考察を試みることも目標の一つとした。

『明細帳』は城戸（1994）によって既に詳細な分析が行われており、本渡航は主に城戸（1994）の成果をもとに歴史地理学の立場からどのように考察を深めることができるかという観点で行った。

成果 Outcome

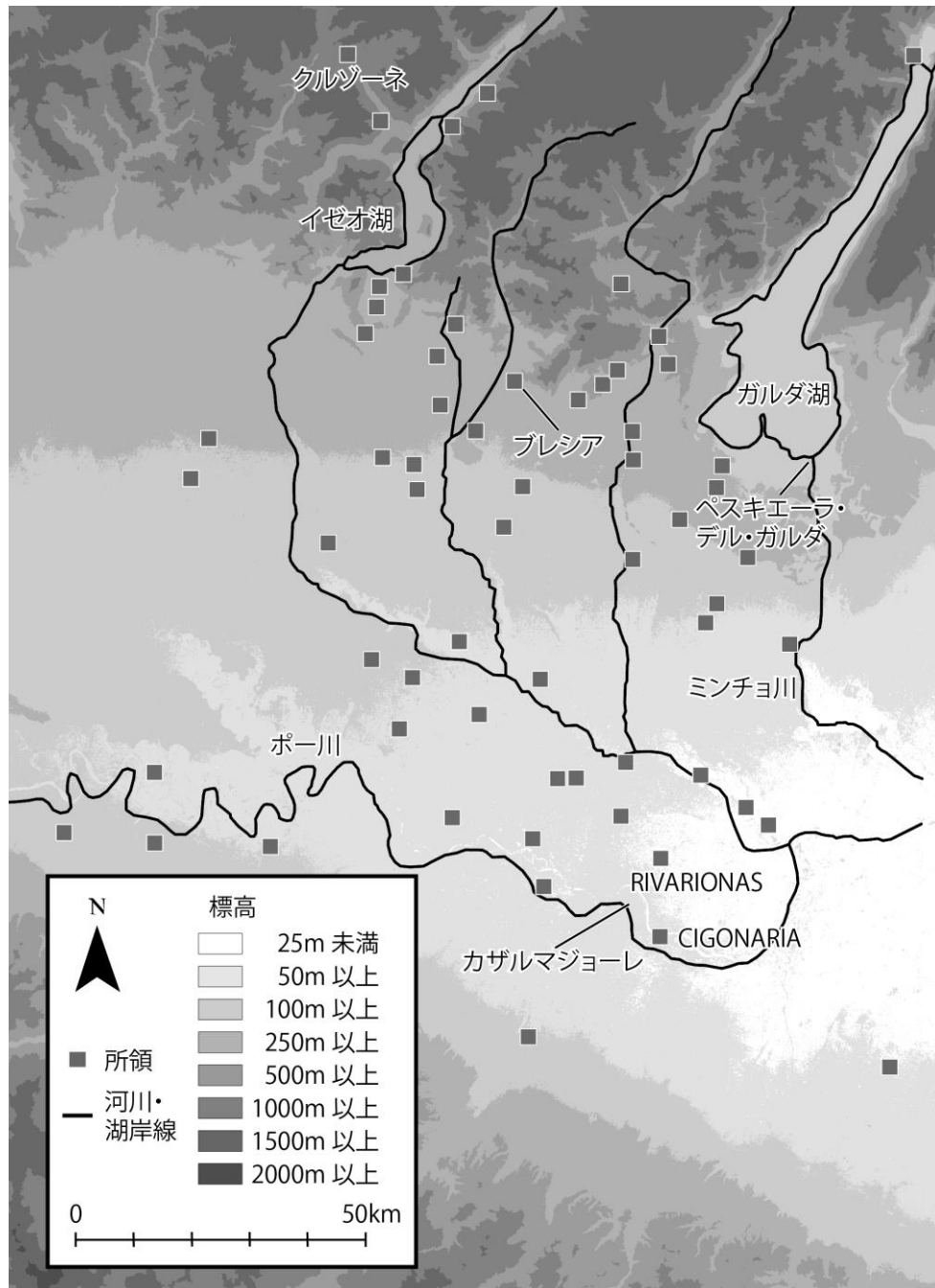
1 地図の作成

前述のように『明細帳』は城戸（1994）によって既に詳細な分析が行われている。そこでは、『明細帳』の記載内容を地図化し分析されているものの、主要な河川と湖岸線以外の地形情報が全く表現されておらず、地形条件と『明細帳』の記載内容との関係が分かりにくい。そこで本渡航に先立ち、城戸（1994: 214）の地図2をもとにそれらの情報の一部を標高データの上に重ね合わせた図を作成した（第1図）。

第1図からは、『明細帳』に記載された所領群が所在する地域のおおまかな地理的特徴をつかむことができる。まず、当地域は北部の急峻な山々と南部の比較的傾斜の緩やかな平野という対照的な2つの地形条件を持つ地域からなることがわかる。北部の山間部から平野にかけ

ておおよそ北北東から南南西にかけて伸びる谷が複数存在し、中にはガルダ湖やイゼオ湖のように大きな湖が所在する谷もある。河川は北部の山間部からそれらの谷や湖を経て南流し、ポー川に合流する。反対にポー川以南では、南部の山々から河川が北流してポー川に合流する。サンタ・ジュリア・ディ・ブレシア修道院が所在するブレシアは、山間部から平野部の接点に位置し、いわゆる谷口集落の一種とみなすことができる。

第1図を離れてより広域のスケールに目を転じると、『明細帳』の所領群（第1図）はポー平原のおおよそ中央部に位置している。ブレシアの東西にそれぞれ位置するペローナやベルガモといった都市は、ブレシアと同じくポー平原と北部の山地の接点に立地しており、少なくともブレシア周辺の地域においてはいわゆる谷口集落の立地に都市が形成されるという類似した構造を読み取ることができる。



第1図 『明細帳』に記載された地域

城戸（1994: 214）地図2をもとに ArcGISPro2.8.8 を用いて作成。ベースマップには JAXA 作成の現代の標高データ（ALOS 全球数値地表モデル（DSM）"ALOS World 3D（AW3D30）"）を用いた。河川や湖岸線は城戸（1994: 214）地図2をトレースした。

2 現地の景観

本章では、調査で訪れた地域・集落のうち 4 か所を取り上げる。

●クルゾーネ

山間部の標高約 650m に位置する集落で、19 世紀には都市として認められた集落である（写真 1~4）。『明細帳』には、木材、羊の毛皮、チーズの賦課租、賦課租の羊、鉄と鉄製農具の賦課租の記載があり、水車も設置されていた（城戸, 1994）。集落（特に旧集落部分）は山麓部に張り付くように展開しており、おおむね山麓部の街道沿いに家々が並ぶ形で発展したものと推測される。ただし、『明細帳』作成時から集落の景観は大きく変わっている可能性も考えられ、少なくとも現時点で筆者は集落の景観から往時の産業の痕跡を読み取ることはできなかった。

当地では、観光案内所に勤務する若い男性（クルゾーネ出身者）に英語で聞き取りを行った。彼によれば、クルゾーネ周辺の地域は農業にあまり適しておらず、林業や牧畜業などが重要な産業だったといい、中でもクルゾーネは松の産地として有名だったという。実際、クルゾーネ集落付近の山林では多くの松の木を目にすることができた（写真 6）。また、牧畜業に関しては、牧草を求めて夏には羊を近隣の高山（写真 7 など）に連れて上り、冬に羊を連れて下山するというスタイルが盛んであったらしい。城戸（1994）によれば、羊や羊毛、チーズはクルゾーネのような北部山間地域からだけでなく標高の低い平野部地域からも納められているが、地形環境や植生、地質、気候に大きな差異がある平野部と山間部で飼育される羊はそれぞれ何らかの差異があった可能性があり、したがって納められた羊・羊毛・チーズにも何らかの質的差異があった可能性もあるのではないだろうか。

一方、鉄に関しては有力な手掛かりを得ることが出来なかった。『明細帳』において鉄はクルゾーネだけでなくその周辺の複数の山間部地域からも納められていたことから、この周辺が鉄の産地であったと推測される。後にも述べるように、中世以降ブレスシアが鉄を用いた武器・兵器の産地として発展したのも、こうした山間部から豊富に供給される鉄によるものではないかと推測される。今後、地質図などを用いて考察を行うことで、鉄の産出に関するより詳細な検討が可能になると考えている。



写真 1 クルゾーネの集落



写真 2・3・4 クルゾーネの町並み



写真 5 クルゾーネ周辺の農家と耕地

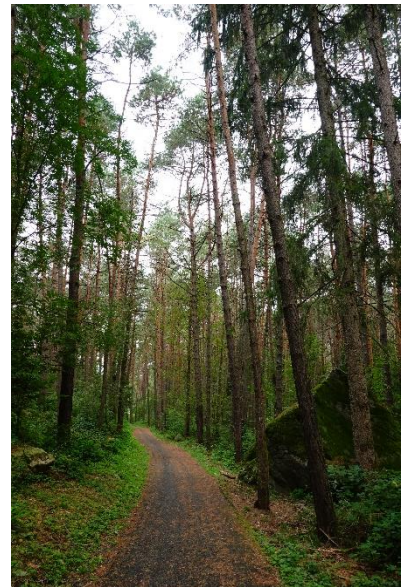


写真 6 松林



写真 7 山上の牧草地

聞き取りを行った方によれば、写真7に写る林地を除く土地の多くは牧草地であるという。

●ブレシア

サンタ・ジュリア・ディ・ブレシア修道院が所在するブレシアは、近隣地域の中で中核を占めつづけてきた都市である。その都市としての起源は古代ローマ時代にまで遡ることができ、現在でもその一部が遺跡として保存されている。ブレシアは山地と平野部が接する場所に立地しており、典型的な谷口集落の一種とみなすことができる。後述のように中世段階でブレシアに川湊が存在したことやブレシア以北では土地の傾斜が大きくなる（第1図）ことを踏まえ、ブレシア付近は船の遡上限界（船で到達することのできる最上流の地点）であると推測されることから、ブレシアは河川舟運と陸運との結節点に立地しているともいえるだろう。

サンタ・ジュリア博物館では、古代からのブレシアとその周辺地域の歴史に関する展示が充

実していた。特に、古代の街道、耕地、集落、墓地、舟運に関する展示からは、『明細帳』にみる産業分布を考察するうえで重要な情報と示唆を数多く得ることができた。例えば、古代の段階ですでにブレシアに求心的な街道網が整備されていたことや、中世の段階でブレシアに川湊があったことは当時の流通を考えるうえで極めて重要であるし、古代の集落・耕地・墓地の分布に関する展示からは本研究において『明細帳』に記載されていない地域・集落の存在にも留意して考察する必要性・重要性に気づかされた。また、展示パネルの中には説明文や図表の出典が記されるものも複数あり、今後関連文献を探す際の重要な手掛かりを得ることができた。

続いて訪れた古代武器博物館では、ブレシアやその周辺地域（ミラノ・ベルガモなど）で生産された甲冑や剣、馬具、鉄砲、大砲などの武具・兵器に関する展示を目にした。展示解説によるとブレシアは中世以降こうした武具・兵器の一大生産地であったという。なぜブレシアがそうした武器・武具の産地として栄えたのかという点に関して解説はされていなかったが、『明細帳』において北部の山間部の複数の地域から鉄が納められていたことを勘案すると、北部山間地域から原材料となる鉄、さらにはその加工に必要となる燃料（炭などの木材）を豊富に入手できたことが関係しているのではないだろうか。ブレシアと同じく平野部と北部の山地の接点に立地するベルガモ・ミラノなどにおいて武具・兵器が多く生産されていたことも、同様の理由で説明可能かもしれない。



写真 8 ブレシア城から望むブレシア旧市街



写真 9 ブレシア城



写真 10 サンタ・ジュリア博物館

●カザルマジョーレとポー川

カザルマジョーレはポー川の左岸に立地する集落であり、『明細帳』では RIVARIONAS や CIGONARIA の近隣に比定される。ポー川はイタリア北部を西から東へと横断してアドリア海にそそぐ大河であるが、写真 11 にあるように少なくとも当地付近においては水量が豊富で流れは緩やかであり、第 1 図の標高をみても極めて河床勾配の緩やかな河川であることがわかる。こうした諸条件を備える河川は水運に最適であると考えられ、実際に後日訪れたヴェネツィア海軍博物館では 900 年代初めのポー川で使用されていた比較的サイズの大きな物資運搬船に関する展示をみる事ができた。水運に適した大河であるポー川は古い時代からイタリア北部地域の地域構造に大きな影響を及ぼし、流域地域の発展を支えたと推測される。このような水量・長さ・河床勾配などの諸条件を備えた河川は日本ではほとんどみられないため、前近代の日本と比較するうえでは大きな相違点になると感じた。



写真 11 ポー川（カザルマジョーレにて撮影）

●ガルダ湖周辺

ガルダ湖はイタリアで最大の面積を有する湖であり（地球の歩き方, 2019: 309）、同湖からはミンチョ川が流れ出ている。『明細帳』にはガルダ湖の北部、南西部およびミンチョ川流域の地名が登場する。

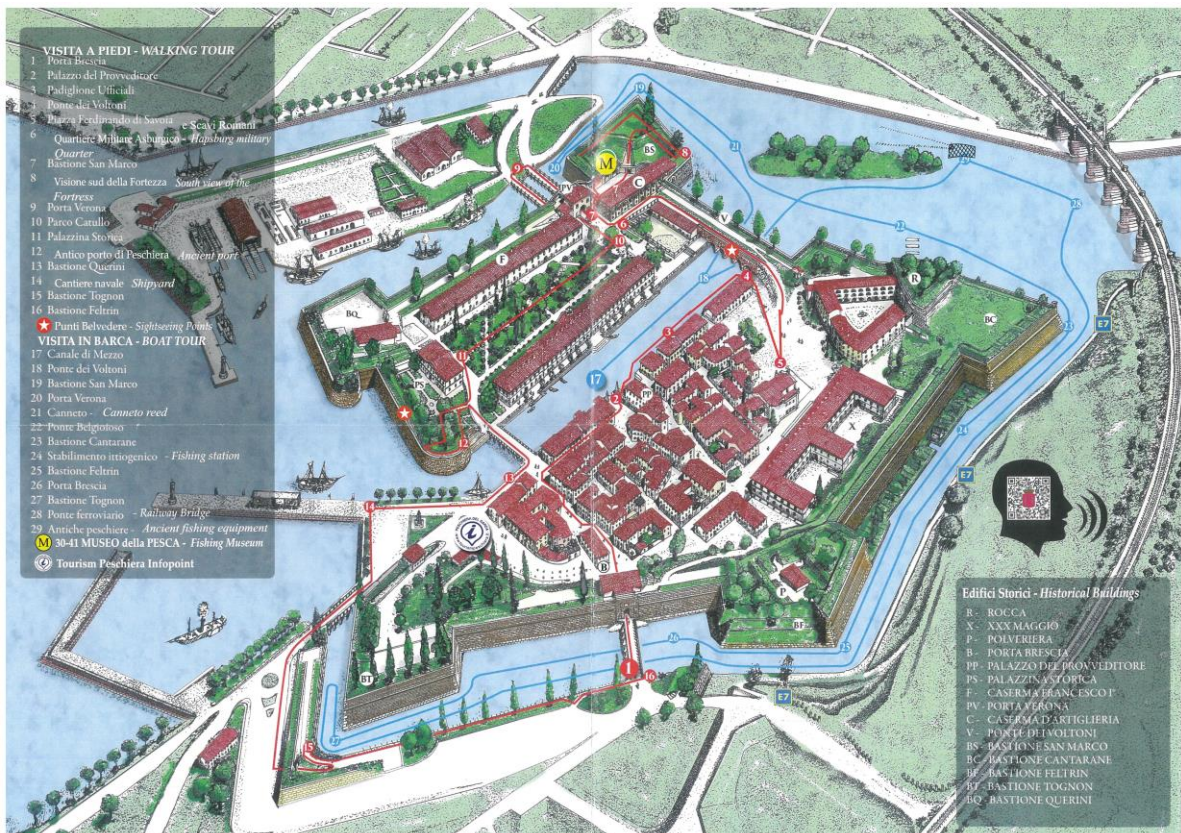
筆者が訪れたペスキエーラ・デル・ガルダはガルダ湖とミンチョ川の接点に位置し、集落全体が要塞化されている（第 2 図）。ミンチョ川の河川沿いに城郭を擁する集落が複数存在することも併せて考えると、ガルダ湖—ミンチョ川—ポー川間に比較的多くの人・モノの流れが存在し、要塞や城郭はそうした水運を把握・監視・管理する目的で設けられたと推測できる。筆者は現時点で各城郭が使用されていた時期を正確に把握できていないが、こうした人・モノの流れは『明細帳』作成当時も何らかの形で存在していたものと思われる。



写真 12 ペスキエーラ・デル・ガルダ



写真 13 ミンチョ川の定置網



第 2 図 ペスキエーラ・デル・ガルダのイラストマップ

向かって左（北）がガルダ湖、右（南）がミンチョ川

（現地にて入手した観光パンフレット「PESCHIERA DEL GARDA」より転載）

3まとめ

本渡航では、上記の 4 集落・地域をはじめ『明細帳』に記された所領内およびその周辺の地域を多数訪れた。その中で気づいた点をまとめたい。まず、集落の景観から『明細帳』作成時の景観を読むことは、予想以上に困難であった。その理由として、『明細帳』が作成されてから約 1000 年という時間のなかで各集落は大きな変容を遂げていること、そもそも産業や職人の痕跡は集落の景観に刻まれづらいと考えられることの 2 点が想定される。特に後者については、日本の歴史地理学において職人は際立った景観を成さないことが指摘されている（河島, 2021: 1）ことから、今回の調査対象地に限らない現象である可能性が考えられる。一方、広域のスケールで見ると地形条件や地質、気候などの変化は比較的小さく、考察の糸口となる場合が多いと感じた。例えば鉄や木材、牧畜、河川舟運などに関してはこうした観点か

ら今後考察を深めることができると考えている。

次に、当該地域内における『明細帳』に記載されていない地域・集落の存在を考慮する必要性・重要性に気づかされた。筆者が訪れた集落の中には古代ローマ時代からの遺跡が存在するものも多く、『明細帳』に直接記載のない場所についても同様であった。こうした事実に加え、サンタ・ジュリア博物館の展示において古代ローマ時代の時点で既に『明細帳』に記載された所領群よりも密な集落分布が示されていたことを考え合わせると、『明細帳』作成時点において『明細帳』に直接記載のない地域においても都市や村落が少なからず存在していた可能性が想定できる。であるとするならば、『明細帳』に記載されている地域や諸情報が当該地域においてどのような位置にあるのかについて考察する必要があると感じた。

最後に、本渡航全体を通じて、城戸（1994）をもとに歴史地理学の観点からさらに考察を深めることは十分可能であると感じた。今後、標高や地質、植生などの自然条件や、集落の分布、街道、人々の生業などの人文条件を踏まえてそれらの諸情報を第1図や城戸（1994）所収の図に重ね合わせることで、『明細帳』が示す地理的情報をより精緻かつ適切に解釈し、当該所領における産業の空間構造への理解を深めることが可能になると考えられる。

今後の展望 Prospects for the future

以上のように、本渡航において筆者は『明細帳』を用いた産業の観点からみた当該所領の地域的特徴の解明を試み、一定の成果と今後の研究への手がかりを得ることができた。今後の課題としては、サンタ・ジュリア博物館の展示に記載された諸文献を手掛かりに文献調査を行うこと、地質や植生などの諸情報との関連を検討すること、街道などの復原を行うこと、近代の地形図などをもとに読図を行うことなどが挙げられる。こうした諸情報を第1図や城戸（1994）所収の図に重ね合わせることで、『明細帳』が示す地理的情報をより精緻かつ適切に解釈することが可能になると考えられる。

また、海外調査全般に関する課題として、筆者は本渡航において言語の壁の大きさを身をもって感じた。筆者は研究対象地域で用いられる主要言語であるイタリア語を全く習得していないため、史料や先行研究、現地博物館における展示解説などを読む際に困難に直面した。本来は調査に必要な言語を習得することが望ましいが、史料や研究論文を読解できるほどの語学力を新たに獲得することは中近世の日本を主要な研究対象とする筆者にはややハードルが高い。そこで、筆者が既に一定程度の語学力を有する英語圏を海外調査のフィールドにすることで、非英語圏での調査と比較して史料や研究論文にアプローチしやすくなることが予想される。先行研究や史料によりアプローチしたうえでの調査に挑戦するという観点から、今後博士課程在学中を目途に英語圏を対象とする調査にも挑戦したい。

一方で、言語の点での困難があったとしても、比較の視点を持ち合わせることである程度の発見や着想、知見を得ることは可能であると感じた。それは筆者が日本の中近世を対象に行ってきた研究の過程で未熟ながらも得てきたノウハウや研究手法、視点、研究の過程で生じた疑問の蓄積などによって可能になったといえる。そのため、自らの主要な研究を充実させる事自体が海外調査でより多くの学びを得る近道の一つとなることを実感した。また、海外調査は自らの主要な研究対象を相対化して捉える絶好の機会となり、自らの主要な研究に対しても多くのフィードバックをもたらすことがわかった。筆者のように海外を自身の主要な研究対象としない者が海外調査を行う意義は、こうした比較の視点からの考察によって両者それぞれへの理解・知見を深めることができる点や自身の主要な研究対象・研究テーマをより広い視野のもとで捉え直す機会になる点にあるのではないかと感じた。

このように海外調査の意義や可能性の一端を実感することができたが、筆者にとって今回がはじめての海外調査であり、未熟な点ばかりである。今後は自身の日本における主要な研究に加え、こうした海外調査にも積極的に挑戦することで、広い視野のもと自らの研究をより良いものにしていきたい。

最後になりましたが、この度は渡航を支援していただき誠にありがとうございました。京都大学大学院教育支援機構の方々をはじめ、関係者の皆様に感謝申し上げます。

【参考文献】

河島一仁 (2021). 『職人集団の歴史地理—出稼ぎ鍛冶の地域的展開—』 古今書院.

城戸照子 (1994). 中世初期イタリア北部の農村構造. 経済學研究, 59, 211-234.

地球の歩き方編集室編 (2019). 『地球の歩き方 A09 イタリア 2020～2021 年版』 株式会社地球の歩き方.

吉田彬人 (2023). 『長宗我部地検帳』にみる土佐国における職人の居所分布. 人文地理, 75(3), 掲載頁未定.

Castagnetti, A., Luzzati, M., Pasquali, G., Vasina, A., eds. (1979). 『Inventari altomedievali di terre, coloni e redditi』 Istituto storico italiano.